

# 多文化共生に関する シンポジウム 2

## 共同体と人間性と聖なるもの

新しい経済の基盤の可能性を  
カンボジア・アンコール寺院群の破壊と再生から考察する

昨年のシンポジウムでは精神性と人間性を重視した普遍的価値観を共有することで多文化共生社会における文化的・宗教的対立を超える可能性を議論した。今年はさらに次の一步を踏み出して、西洋の哲学と東洋的価値観という異なる視点からの眼差しをとりわけ意識しながら、我々の人間性の発露としての共同体・地域社会に着目する。ここで我々が考えるべきは、「地域社会の質はどのようにして決まるのか?」「なにが地域社会をよくするのか?」「なにが地域社会をだめにするのか?」そして最後に「宗教や聖なるものの“共同体の質”にどのような役割を果たすのか?」という問いかけである。今回のシンポジウムでは、創造経済に軸足を置きながら、偶発的な結果としての「共同体における満足度」ではなく、経済理論や政策の基盤として「質の高い、あるいは満足度の高い共同体とはなにか」ということを考えていく。

共同体の共通価値観や伝統が失われると、地域社会や人々は生存の危機にさらされる。これは決して絵空事ではなく、21世紀の私たちの未来にも、これまでの過去にもあてはまることで、カンボジアで起きた悲劇はその一例である。敬虔な仏教国であるカンボジアの、内戦後の国家の象徴とも言えるアンコール遺跡群は、内戦中には戦闘の拠点として使われ、それを司る仏教界も徹底した迫害にあった。そのアンコール遺跡群の再興と最近の開発を例にとり、有形無形を問わず地域社会の歴史や伝統、文化に重要な聖なる場の破壊と復興がもたらす含意を探ることで、質の高い地域共同体が成立するための要件を探る。

地域に根ざした聖なるなにかに触れることで、普遍的価値観と地域社会への帰属を心の深いところで確認できるのかもしれない。地域社会の充実はそれにとどまらず、人間性と精神性そして普遍的価値観に重きをおく社会をグローバルなレベルで目指す変革につながる。果たして、経済学は21世紀の危機的状況を乗り越えるために、人間のかつ精神的な営みをさらに重視する方向に転換できるのだろうか?

とき 2015年 6月 8日(月) [12時 30分 開場] 13時~17時

ところ 同志社大学 今出川キャンパス クラーク記念館 

- プログラム : 13:00~15:10 パネリストによる発表  
15:10~15:30 休憩  
15:30~17:00 パネルディスカッション
- パネリスト : スティーブン・ヒル (ウォロンゴング大学名誉教授・オーストラリア)  
竹本 忠雄 (文人、筑波大学名誉教授)  
チャウ・スン・ケリヤ (APSARA機構広報官・カンボジア)
- プロデュース : ツトム・ヤマシタ (アーティスト、同志社大学創造経済研究センター St.Core 研究会ディレクター)
- 司 会 : 同志社大学 創造経済研究センター 特別研究員 (PD) グレース・ゴンザレス
- 実施責任者 : 同志社大学 経済学部 教授 八木 匡
- 主 催 : 同志社大学 創造経済研究センター
- 共 催 : 同志社大学 博士課程教育リーディング・プログラム グローバル・リソース・マネジメント (GRM)  
同志社大学 ライフリスク研究センター
- 協 力 : 株式会社 サウンド・コア
- 後援 (予定) : 京都府・京都市

入場無料

定員 100名  
先着順